

平成31年(2019年)2月19日

れきみん

# 資料館だより

No. III-17

相生市立歴史民俗資料館

## 〈資料紹介12〉「ぶん福茶釜」の謎(その2)

『ぶん福茶釜の由来』(以下『由来』と略す)という冊子があります。この冊子は「赤穂三濃山人述」とありますが、発行者・発行年ともに記載がありません(印刷は上郡町吉岡三美堂)。文言や内容から、大正8年(1919年)年以降に茶釜の保管人らによって、観覧者らに配付することを目的に作成されたものと考えられます。

『由来』には、茶釜は秦河勝の愛用品で、河勝が三野山(三濃山)を退去する際に保本家に預けたものであるとの伝説をはじめ、秦河勝の三本卒塔婆伝説、求福教寺・三濃山・羅漢溪に関わる伝承などが記載されています。

また、茶釜の名称についての記述もあります。「本派本願寺の布教師利井興隆氏はこの鳴響を聞いて千古の秘音と銘打って居る、その形普通の鐘子に似て口があり三本の足が付いて居る至極奇妙な恰好である湯が沸きかへると『リ、ハ、イ』と言ふ妙音を發して茶釜の蓋がキリッと回る名付けて『ぶん福茶釜』と言ふ」とあり、この記述に従えば、利井興隆が「ぶん福茶釜」と命名したということになります。利井が茶釜を観覧し「千古秘音」の書と「興隆」の名を『名釜観覧人名記』(以下『人名記』と略す)に記したのは大正8年(1919年)年のことで、その時に名づけた可能性が考えられます。

しかし、前号で紹介したように、『人名記』には大正4年(1915年)2月付けで「分福茶釜」の名称が見えることから、『由来』との齟齬が生じることになります。一つの解釈として、有名な狸の伝説を有する茂林寺(群馬縣藤岡市)の茶釜が「分福茶釜」であることから、利井がそれと区別するために「分」を平仮名に改め、その後『由来』に記されたと考えられるかもしれません。

一方、矢野町森で生まれ郷土史家として活躍した小林楓村(1886～1969)は、『相生史話』(1963)の中で、「当寺に秦川勝の愛し所持していたという文福茶釜がある。沸煮すればチリンチリンの秘音が数丁の外洩れる。昔は鳴り錐子とっていたのを福田眉仙が改名した。しかし、世に稀なるものであるが、狸の伝説はない。」と記しています。

福田は小林と親交が深く、『人名記』に観覧芳名の一番に名を連ねていることを重視すれば、「文福茶釜」の名づけ親が福田である可能性は高いと思われます。ただし、小林は「分福」や「ぶん福」でなく、「文福」の文字を使っています。

小林は、早く大正末期～昭和初期に「文福茶釜」について紹介しています。『矢野史談』第31号(1926)に「矢野村名所旧蹟の栞り」を著し、「文福茶釜 秦川勝公ノ遊 獵ノ時持參セシモノトイフ。茶釜ノ形カラシテ鎌倉時代ノ初期ノモノデアラウト。世ニ名高イ野州茂林寺ノ文福茶釜ヨリズットヨイトノ話デアル。現在ハ山本区長宅ニアル。」と述べています。ここでは製作時期について言及し、茂林寺の茶釜にもふれています。

また、三濃山求福教寺<sup>ぼしん</sup>戊辰開帳記念号として発行された『やの』第37号(1928)の「文福茶釜について」の項に、「三濃山求福教寺<sup>ぼしん</sup>の寶物<sup>ほうもつ</sup>で昔秦川勝の遊獵ノ時持ち來たりしものといふ其形普通の鐘子に似て口があり三本の奇妙な格好の足がある。湯が沸きかへると『リリンリリン』となる。千古の秘音<sup>ひしん</sup>數<sup>すう</sup>丁の外に聞える。播磨史談會<sup>せつしゅう</sup>會長矢内さんは攝州芦屋釜で鎌倉時代初期の製作物ならんと云はる。」「福田眉仙<sup>まへせん</sup>畫伯曰く名高い上州茂林寺の鐘子より形も鳴音も勝れたり然るに彼は宣傳上手であつたに反して此方は山間僻地に保存してゐたから世上に知られないと。」と記し、併せて茶釜を詠んだ橋本海關<sup>かいかん</sup>(1852～1935 明石生まれの詩人・書家・画家、橋本關雪の父)の漢詩を紹介しています。

ここからは、三濃山の茶釜の価値を周知したいという小林と福田の熱い想いを読み取ることができます。福田が茂林寺の茶釜を強く意識していたことがうかがえ、「文(分)福茶釜」の名称が福田によつ与えられたことを間接的に示唆しているようです。

ここで注目されるのは、矢内(知勸)からの教示として、製作年代に加えて製作地についてふれていることです。しかし、根拠が示されていないため、その成否は今後の調査・研究を待つしかありません。

なお、矢野村史談会の求福教寺戊辰開帳記念事業として、三濃山を中心とした『矢野村史蹟絵葉書 其二』や『矢野村史蹟名所案内』が発行され、「文福茶釜」が広く紹介されました。

小林の著作や矢野村史談会の活動の影響は大きく、その後「文福茶釜」の名称が定着していったものと考えられます。『人名記』にも、昭和9年(1934年)や昭和13年(1938年)に「文福茶釜」という名称の記載が見られます。また、後に書かれたほとんどの紹介文は、小林の記述をもとに書かれたものと考えられます(例として奥田1992)。



『矢野村史蹟絵葉書 其二』

では、いつごろから宝物として扱われるようになったのでしょうか。保本家が売却したという時期や三濃山の村人が(橋本・松本編2009～収集)買い戻したという時期がはっきりしないため、これを明確にすることはできません。文政5年(1808年)に書かれた『三野山求福教寺縁起』に記載がないことを重視すれば、幕末～明治期頃と考えることもできますが、現時点では今後の課題というほかありません。

現在、本資料は元興寺文化財研究所(糸柿)で錆止めの保存処理を行っていますが(4願釘錠)、製作された時期や場所の解明についても依頼しています。今後、文化財としての歴史的価値が明らかになることが期待されます。

(完)

〈参考文献・史料〉前号に記載したものは除く

奥田1992『相生ふるさと散歩』(相生市教育委員会)

小林楓村1926「矢野村名所旧蹟之栞り」『矢野史談』第31号(矢野村史談会)

小林楓村1928.5「文福茶釜について」『やの』三濃山求福教寺戊辰開帳記念号・第37号(矢野村史談会)

橋本一彦・松本恵司編2009～収集『相生映像アーカイブ(データ版)』(NPO法人相生いきいきネット)

矢野村史談会1928.春『矢野村史蹟絵葉書 其二』

矢野村史談会1928.春『矢野村史蹟名所案内』

(中濱久喜)